

継続的カンファレンスへの参加における 保育者の課題意識

利根川 智 子・和 田 明 人・音 山 若 穂*
三 浦 主 博**・上 村 裕 樹***

要旨：法人内の保育所が一堂に会し継続的かつ定期的実施されてきたエピソード記録を用いたカンファレンス、フォトカンファレンス、ビデオカンファレンスに取り組む保育者の意識や変容について、参加した保育者が記述したワークシートのうち、「自ら（の園）の課題と思われること」を中心に、記述のテーマ・構成概念からどのような課題意識が析出しうるのかを探索的に検討した。保育者がファシリテーターを務めて発表を行う研修を通して、より研修の進め方や内容に関する記述、研修と実践に関する記述が出てきていることから、学んだ内容とそれを活かした実践を行っていくことによる保育場面での気づき、課題の発見があったと考えられた。また、園ごとの記述の分析において、カンファレンスの進め方、エピソード記録の取り方、保育の質向上、職員間の対話が多くの記述されていることから、研修を重ねるうちにそれらを意識していったことが明らかになった。一方で、多忙な中で保育所内の職員が対話することが難しい状況にあるなどの共通点が示唆された。

キーワード：継続的カンファレンス、保育者、課題意識

I. 問題と目的

保育実践の場では、職員の研修による保育者の資質向上が不可欠である。

保育者としての成長については、保育の省察をおこなうことと関連して、日々の保育の中で起きていることを素材としたエピソード記録や保育場面の録画や写真を用いた記録を活用する研修が期待されている。これまでの間に、記述的エピソード法を用いた園内研修会のシステム構築も試みられている（今村ら、2013）¹⁾。奥山ら（2006）²⁾によれば、エピソードを用いた研修は、保育者の感情の動きや判断も含めた記述によって、本人のみならず他の保育者も保育者としての役割を省察し、対象とする幼児に関する検討から保育全体への課題へと展開して考察する資料となり得る。また、保育者の小グループごとおよび園全体でのエピソード記録の検討を通して保育の振り返りをおこなうことで、子どもの遊びについて、保育者がこれまで気づけなかったことに気づいたり、他の保育者の目を通すともっと奥深い発見があったり、お互いの存在への意識を高め

*群馬大学教育学部

**東北生活文化大学短期大学部

***帯広大谷短期大学

たり、保育者の育ちが見られたとする報告がある（平野ら、2007³⁾；平野ら、2008⁴⁾）。保育の記録および振り返りの方法として、保育者による記述のみでなくビデオ録画や写真を使う方法も用いられてきている。保育場をビデオで録画し、保育者全員で録画を視聴し、子どもの表情から子どもの内面で起こっていることに注目した話し合いをした後、保育者自身が録画を見直すなどして課題を発見し改善していく過程を経る中で、自分の保育を客観視したり、自らの癖に気づいたり、学びそのものが楽しくなったりすることが見出された（名須川ら、2003⁵⁾）。

しかしながら、こうした園内の具体的なエピソードを題材に保育の省察を進めてゆく研修において、その研修成果を確認する手法については、現状では十分な知見があるとは言えない。

そこで本研究では、法人内の複数の保育所が一堂に会しおこなわれる研究会において、定期的かつ継続的に実施されてきたエピソード記録を用いたカンファレンス、フォトカンファレンス、ビデオカンファレンスに取り組む保育者の意識や変容について、参加した保育者が感想を記述したワークシートの内容を取り上げ、そこからどのような課題が析出しているのかを探索的に検討することとした。園の数と研修回数がともに複数であることから、参加者による記述には、以下の2つの特徴が含まれていると考えることができるだろう。

- ① 研修の特徴（研修間の比較によって示される、各回の研修にみられる特徴、研修効果）
- ② 保育所の特徴（保育所ごとの比較によって示される、所属する職員に共通する特徴）

II. 方 法

1. 研修及び調査の実施時期

2013年4月から11月にかけて法人内合同の研修が実施され、参加者は各回の研修の最後に感想をワークシートに記入した。各回の研修の内容は利根川ら（2014⁶⁾）に示されている。

2. 協力保育所および協力者

同一法人内11保育所の、所長、主任を含む38名の保育者であった。協力者が研修に参加した回数は、1回から8回であった。

3. 手続き

協力者は、月一度の研修としておこなわれた保育の記録を用いたカンファレンス、フォトカンファレンス、ビデオカンファレンスなどに参加した後、ワークシートに「1. 研修を通じて、新たに学んだこと」、「2. 自ら（の園）の評価できること」、「3. 自ら（の園）の課題と思われること」、「4. 今後、改善・向上に向けてできそうなこと（具体的に日頃の保育に活かさせそうなことなど）」を記入した。本研究においては、「3. 自ら（の園）の課題と思われること」を分析対象とした。

III. 結 果

1. 分析のための保育者の記述の補足と記述内容のテーマ・構成概念の抽出

本研究のような比較的少数のデータについても適用可能な質的データ分析方法としては、SCAT（大谷，2011⁷⁾；大谷，2007⁸⁾）が挙げられる。これは、個々の記述について、① データの中の着目すべき語句、② それを言い換えるためのデータ外の語句、③ それを説明するための語句、④ そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順に考えて処理を行っていくコーディング手法である。この手法を援用して本研究のデータを分析しようとする場合、① および②のステップにおいて情報を整理し、追加する作業が必要となる。その理由は次の通りである。

本研究のデータは一連の継続的園内研修に参加した保育者から得られたものである。また、保育者は同一法人内の保育所に所属している。すなわち、保育職という専門家集団が、共通点も多い職場環境のなかで、内容的に繋がりのある園内研修に参加した上でその感想を記述しているものである。当然、その記述には、専門性に基づく省略や、組織特有の言い換え、それまでの研修内容を踏まえた表現など、個々のデータの語句以外にも、文脈的、背景的な情報が潜在的に多く含まれている。従って、そうした情報を整理し、追加しながら、テーマや構成概念を対応づけていく作業が不可欠となる。

そこで本研究では、保育者の個々の記述（以下、テキスト）について、各テキストの指示対象を明確にした上で保育の専門性をもとに情報を整理し、不足する情報があれば追加した上で、個々人のテキストを単独で評価し、テーマや構成概念を付与することができるようにした。その上で、各テキストについて、それがどのようなテーマや構成概念に対応しているのかを複数評価者で評価し、分類を行った。

1) 文脈的・背景的情報の追加

「1. 研修を通じて、新たに学んだこと」～「4. 今後、改善・向上に向けてできそうなこと」のそれぞれのテキスト（保育者の記述）について、各テキストの指示対象を明確にした上で保育の専門性をもとに情報を整理し、不足する情報があれば追加した。

2) テーマ・構成概念の抽出

以上により、参加者（ $n=38$ ）ごとに各研修回（8回）のテキストを作成した。個人ごとのテキストであるので、これを個人テキストと呼ぶ。1つの個人テキストには、上記4つの設問に対する記述が含まれている。「3. 自ら（の園）の課題と思われること」の記述については、各研修に欠席者がいるので、全部で229の個人テキストが作成された。

次に、無作為の順序で、ひとつずつ個人テキストを読みながら、どのようなテーマ・構成概念が示されているのかを判断した。判断は2人の評価者により、類似した概念を適宜整理するなど調整を行いながら進めた。評価者のうち1名は保育についての専門性を有していた。抽出されたテーマ・構成概念の一例を表1に示す。

表1. 「3. 自ら（の）園の課題と思われること」から読み取られたテーマ・構成概念の一例

テーマ	代表的な概念
CLの進め方	ファシリテーターの役割 記録の取り方 職員への周知 有期職員の参加
エピソード記録の取り方	一人ひとりの子どもへの気づき 園児の特徴把握に時間がかかる 課題意識の共有

2. 研修の特徴

それぞれの研修の特徴を把握するために、上記の1) 文脈的・背景的情報の追加、及び2) 評定者2名によるテーマ・構成概念を整理した後、参加者ごとに、第1回目から第8回目までの研修におけるテーマ・構成概念を書き出した。

研修の特徴を明らかにするため、研修会ごとにテーマを算出した。各研修回で出現回数が多かった上位3つのテーマとその構成概念を表2に示す。以下、研修会の特徴が出ている回を取り上げる。

1) 研修2回目

一番多かったテーマは、第1回目と同様に、「保育の質向上」であり、18の記述があった。構成概念は、「見守る保育」、「見守る保育（保育環境・職員援助）の検討不足」、「子ども主体の保育」、「気を配れる目」、「ことばがけ」、「かわりや声かけ」、「寄り添う保育」、「一人ひとりの子どもへの気づき」、「安全への配慮」、「CL（カンファレンス、以下、CL）から得た課題への取り組み」であった。二番目に多かったテーマは、「CLの進め方」であり、11の記述があった。構成概念は、「意義の理解」、「職員への周知」、「時間」、「参加者確保」、「他職員への伝え方」であった。三番目に多かったテーマは、「エピソード記録の取り方」であり、9つの記述があった。構成概念は、「とまどい」、「撮影方法」であった。

2) 研修4回目

一番多かったテーマは、「CLの進め方」であり、24の記述があった。構成概念は、「意義の理解」、「モチベーション」、「記録の取り方」、「時間」、「やらされ感」、「保育がおろそかにならないよう」、「職員への周知」、「職員間の意識差」、「全職員」、「参加者確保（有期や他の専門職）」、「職員間での浸透」、「雰囲気作り」、「目的の明確化」、「より良い方法の考案」、「ビデオCL」、「ファシリテーター役の育成」であった。二番目に多かったテーマは、「エピソード記録の取り方」であり、4つの記述があった。構成概念は、「日誌になっている」、「乳児職員」であった。三番目に多かったテーマは、「職員間の対話」であり、3つの記述があった。構成概念は、「たわいもな

表2. 各研修回で出現回数が多かった上位3つのテーマと構成概念

研修回数	テーマ	回数	構成概念
研修1回目	保育の質向上	11	見守る保育、一人ひとりの子どもへの気づき、異年齢の良さを引き出す、園児の特徴把握に時間がかかる、発達に合わせた援助、環境設定、他者を通じた省察、主体性の欠如、臨機応変が苦手
	情報共有・連携	7	縦の繋がり、有期も含む
	職員間の対話	4	正規職員と有期職員、時間、対話の機会が少ない
	モチベーション	4	変化に消極的
研修2回目	保育の質向上	18	見守る保育、見守る保育（保育環境・職員援助）の検討不足、子ども主体の保育、気を配れる目、ことばかけ、かかわりや声かけ、寄り添う保育、一人ひとりの子どもへの気づき、安全への配慮、CLから得た課題への取り組み
	CLの進め方	11	意義の理解、職員への周知、時間、参加者確保、他職員への伝え方
	エピソード記録の取り方	9	とまどい、撮影方法
研修3回目	CLの進め方	23	意義の理解、時間、職員への周知、職員間の意識差、参加者確保、乳児組も含む、全職員、有期職員、フォトCL、ビデオCLの活用、撮影方法、他職員への伝え方、CLから得た課題への対応とその確認方法
	職員間の対話	8	時間、問題や課題指摘の抵抗感
	保育の質向上	4	臨機応変が苦手、見守る保育、見守る保育（保育環境・職員援助）の検討不足、CLから得た課題への取り組み
研修4回目	CLの進め方	24	意義の理解、モチベーション、記録の取り方、時間、やらされ感、保育がおろそかにならないよう、職員への周知、職員間の意識差、全職員、参加者確保（有期や他の専門職）、職員間での浸透、雰囲気作り、目的の明確化、より良い方法の考案、ビデオCL、ファシリテーター役の育成
	エピソード記録の取り方	4	日誌になっている、乳児職員
	職員間の対話	3	たわいもない話から始める、機会が少ない
研修5回目	CLの進め方	24	意義の理解、モチベーション、記録の取り方、撮影方法、時間、職員間の意識差、職員への周知、参加者確保、有期職員の参加、参加者確保（有期や他の専門職）、職員間での浸透、雰囲気作り、より良い方法の考案、ファシリテーター役の育成、サブグループ化、園独自の発展
	エピソード記録の取り方	6	日誌になっている、乳児職員
	職員間の対話	3	機会が持てない、メンバー固定、参加者を増やすには
研修6回目	CLの進め方	19	時間、やらされ感、職員への周知、職員間の意識差、全職員、参加者確保、職員間での浸透、有期職員の参加、他職員への伝え方、より良い方法の考案、ファシリテーター役の育成、サブグループ化、発表準備
	エピソード記録の取り方	6	乳児職員
	職員間の対話	5	時間、全体での機会がない、参加者を増やすには、雰囲気作り
研修7回目	CLの進め方	17	時間、職員間の意識差、職員への周知、全職員、職員間での浸透、有期と正規、習慣化されていない、他職員への伝え方、より良い方法の考案、ファシリテーター役の育成、発表準備、資料の作り方
	エピソード記録の取り方	9	乳児職員、撮影方法
	職員間の対話	4	雰囲気作り、人まかせの職員、担当者まかせ
研修8回目	CLの進め方	21	時間、職員間の意識差、全職員、参加者確保、有期職員の参加、職員間での浸透、正規と有期を別日に工夫、より良い方法の考案、ファシリテーター役の育成、次のテーマの決め方、有期からの活発な意見、意見を飲み込む
	エピソード記録の取り方	10	乳児職員、対象園児に偏り
	保育の質向上	5	やらされ感、CLからより深く子どもの想いを、想いを保護者と共有、CLの結果を活かした保育

い話から始める」,「機会が少ない」といったことだった。

3) 研修6回目

一番多かったテーマは,「CLの進め方」であり,19の記述があった。構成概念は,「時間」,「やらされ感」,「職員への周知」,「職員間の意識差」,「全職員」,「参加者確保」,「職員間での浸透」,「有期職員の参加」,「他職員への伝え方」,「より良い方法の考案」,「ファシリテーター役の育成」,「サブグループ化」,「発表準備」であった。二番目に多かったテーマは,「エピソード記録の取り方」であり,6つの記述があった。構成概念は,「乳児職員」であった。三番目に多かったテーマは,「職員間の対話」であり,5つの記述があった。構成概念は「時間」,「全体での機会がない」,「参加者を増やすには」,「雰囲気作り」といったことだった。

4) 研修8回目

一番多かったテーマは,「CLの進め方」であり,21の記述があった。構成概念は,「時間」,「職員間の意識差」,「全職員」,「参加者確保」,「有期職員の参加」,「職員間での浸透」,「正規と有期を別日に工夫」,「より良い方法の考案」,「ファシリテーター役の育成」,「次のテーマの決め方」,「有期からの活発な意見」,「意見を飲み込む」といったことだった。二番目に多かったテーマは,「エピソード記録の取り方」であり,10の記述があった。構成概念は,「乳児職員」,「対象園児に偏り」といったことだった。三番目に多かったテーマは,「保育の質向上」であり,5つの記述があった。構成概念は,「やらされ感」,「CLからより深く子どもの想いを」,「想いを保護者と共有」,「CLの結果を活かした保育」であった。

研修初回の記述におけるテーマは「保育の質向上」,「情報共有・連携」,「職員間の対話」,「モチベーション」などであったが,研修の回を重ねるにつれて,「CLの進め方」,「保育の質向上」,「エピソード記録の取り方」,「職員間の対話」が出現する等,テーマ・構成概念の出現回数が増加してきている。

また,「保育の質向上」については,初回と第8回目の記述に出現しているが,構成概念は「見守る保育」,「一人ひとりの子どもへの気づき」といったことから,「CLからより深く子どもの想いを」,「想いを保護者と共有」といったように研修の内容を反映した構成概念へと変化していた。

3. 保育所の特徴

保育所の特徴を明らかにするため,保育所ごとにテーマを算出した。各保育所で出現回数が多かった上位3つのテーマと構成概念を表3に示す。以下,特徴的な保育所の記述を取り上げる。

1) K保育所

一番多かったテーマは,「保育の質向上」と「職員間の対話」であり,それぞれ7つの記述があった。「保育の質向上」の構成概念は,「見守る保育」,「見守る保育(保育環境・職員援助)の検討不足」,「園児の特徴把握に時間がかかる」といったことだった。「職員間の対話」の構成概念は,「たわいもない話から始める」,「機会が持てない」,「メンバー固定」,「機会が少ない」,「全体で

の機会がない」であった。三番目に多かったテーマは、「情報共有」であり、6つの記述があった。構成概念は、「話し合う時間」、「声かけが少ない」といったことだった。

2) M 保育所

一番多かったテーマは、「CLの進め方」で、11の記述があった。構成概念は、「時間」、「撮影方法」、「職員への周知」、「参加者確保」、「ファシリテーター役の育成」であった。二番目に多かったテーマは、「職員間の対話」で、8つの記述があった。構成概念は「時間」、「雰囲気作り」、「問題や課題指摘の抵抗感」であった。三つ目に多かったテーマは、「保育の質向上」で、6つの記述があった。構成概念は、「見守る保育」、「臨機応変が苦手」、「ことばがけ」であった。

3) T 保育所

一番多かったテーマは、「CLの進め方」で、8つの記述があった。構成概念は、「時間」、「職員への周知」、「有期職員の参加」、「園独自の発展」、「ビデオCL」であった。二番目に多かったテーマは、「エピソード記録の取り方」で、7つの記述があった。構成概念は「乳児職員」、「撮影方法」であった。三つ目に多かったテーマは、「保育の質向上」であり、6つの記述があった。構成概念は「有期職員」、「ビデオCLの活用」、「他者を通した省察」であった。

各保育所で多く挙げられていたテーマのうち、「CLの進め方」は10保育所で、「エピソード記録の取り方」は8保育所で、「保育の質向上」は7保育所で、「職員間の対話」は6保育所で上位3つのテーマに入っていた。「CLの進め方」が入らなかった保育所では、「保育の質向上」、「職員間の対話」、「情報共有・連携」が上位3つのテーマであり、構成概念は、「話し合う時間がない」、「機会が持てない」などであった。

表3. 保育所で出現回数が多かった上位3つのテーマと構成概念

保育所	テーマ	回数	構成概念
K 保育所	保育の質向上	7	見守る保育、見守る保育（保育環境・職員援助）の検討不足、園児の特徴把握に時間がかかる
	職員間の対話	7	たわいもない話から始める、機会が持てない、メンバー固定、機会が少ない、全体での機会がない
	情報共有・連携	6	話し合う時間、声かけが少ない
L 保育所	職員間の対話	9	時間、CL以外でも必要、有期職員と正規職員、CLに消極的な職員、消極的な雰囲気ができつつある、機会が少ない
	エピソード記録の取り方	4	乳児職員
	CLの進め方	3	参加者確保、ビデオCL
M 保育所	CLの進め方	11	時間、撮影方法、職員への周知、参加者確保、ファシリテーター役の育成
	職員間の対話	8	時間、雰囲気作り、問題や課題指摘の抵抗感
	保育の質向上	6	見守る保育、臨機応変が苦手、ことばがけ

表3. つづき

保育所	テーマ	回数	構成概念
N 保育所	CL の進め方	12	時間、参加者確保、参加者確保（有期や他の専門職）、全職員、有期職員の参加、正規と有期の温度差、正規と有期を別日に工夫、有期からの活発な意見、他職員への伝え方、雰囲気作り、意見を飲み込む
	職員間の対話	6	時間、正規職員と有期職員、参加者を増やすには、人まかせの職員、担当者まかせ
	エピソード記録の取り方	5	とまどい、撮影方法、日誌になっている
	保育の質向上	5	やらされ感、行事が負担、かわりや声かけ
O 保育所	CL の進め方	13	時間、乳児組も含む、職員への周知、参加者確保（有期や他の専門職）、有期職員の参加、有期と正規、CL の継続
	情報共有・連携	3	課題意識の共有、有期も含む、
	保護者との接し方	3	-
	保育の質向上	3	寄り添う保育、CL の結果を活かした保育
P 保育所	CL の進め方	25	時間、職員への周知、参加者確保、有期職員の参加、職員間の意識差、モチベーション、撮影方法、ファシリテーターの役割、雰囲気作り
	モチベーション	4	課題意識
	エピソード記録の取り方	2	乳児職員
	職員間の対話	2	時間
Q 保育所	CL の進め方	19	時間、やらされ感、全職員、意義の理解、職員間での浸透、資料の作り方、ファシリテーター役の育成、より良い方法の考案
	保育の質向上	9	やらされ感、課題意識の共有、異年齢の良さを引き出す、一人ひとりの子どもへの気づき、CL からより深く子どもの想いを、CL から得た課題への取り組み、想いを保護者と共有
	エピソード記録の取り方	5	乳児職員
R 保育所	CL の進め方	21	時間、意義の理解、職員への周知、全職員、有期職員の参加、職員間の意識差、ビデオ CL、記録の取り方、ファシリテーターの進め方
	エピソード記録の取り方	6	乳児職員
	保育士の確保	4	-
S 保育所	エピソード記録の取り方	13	乳児職員、撮影方法、対象園児に偏り
	CL の進め方	13	時間、参加者確保、有期職員の参加、職員間の意識差、他職員への伝え方、保育がおろそかにならないよう、習慣化されていない、CL から得た課題への対応とその確認方法
	情報共有・連携	2	保護者対応
	保育の質向上	2	気を配れる目、安全への配慮
	職員の配置不足	2	業務の忙しさ、職員の不安解消

表3. つづき

保育所	テーマ	回数	構成概念
T 保育所	CL の進め方	8	時間、職員への周知、有期職員の参加、園独自の発展、ビデオ CL
	エピソード記録の取り方	7	乳児職員、撮影方法
	保育の質向上	6	有期職員、ビデオ CL の活用、他者を通じた省察
U 保育所	CL の進め方	11	時間、意義の理解、職員間での浸透、職員間の意識差、全職員、有期職員、有期職員の参加、他職員への伝え方、ファシリテーター役の育成
	職員間の対話	5	時間
	エピソード記録の取り方	3	乳児職員

IV. 考 察

1. 研修の特徴（研修間の比較によって示される、各回の研修にみられる特徴、研修効果）

研修の回が進むにつれて、「CL の進め方」、「エピソード記録の取り方」、「職員間の対話」に関する記述が増えていた。

「CL の進め方」については、レクチャーや先行モデル園によるエピソードの紹介の研修が行われている段階では、そうした方法があることを知った、活用方法が分かったといった比較的知識面での記述であった。回を重ねて保育所の発表が増えるにつれて、より良い方法の提案、ファシリテーターの育成、発表準備、資料の作り方など、より研修の進め方や内容に関する記述が出てきていた。

「エピソード記録の取り方」についても、最初は慣れないことへのとまどいや方法についての言及が多かったが、慣れてくると、例えば、エピソードの対象として取り上げる子どもに偏りがあることへの気づきなど、エピソードを記録する際の問題点や課題に言及することが増えていた。

「保育の質向上」については、研修3回目までは上位であった。その後、各回の記述で触れられていないわけではないが、上位に入らなかったことから、相対的に見ると少なくなっているといえるだろう。第8回になると、子どもの思いや保護者との思いの共有、カンファレンスの効果を活かした保育についての内容も出てきており、保育の質について研修を通して考えた結果、深まりが出ていると推測される。

研修で学んだ内容を保育で実践するうちに、学んだ内容とそれを活かした実践を行っていくことによる保育場面での気づきがあったと考えられるのではないだろうか。一方で、どのテーマにおいても、回を重ねても変化が見られない課題が書かれている記述や、時間の無さ、やらされ感、全職員の参加が難しいなどの記述があった。通常の業務を行いながら資料を作成しなくてはならないことが事例報告会に参加することに対する抵抗感を強めている要因でもある（原，2014⁹⁾）とあるように、今回の一連の研修においても、そもそも全員が職場に一堂に会することが難しい

勤務形態の職場で、多忙な業務に向き合いながら、新たに慣れていない方法で研修の準備をして参加することを考える際に、どのような保育場面を撮影するとよいのだろうか、どのようにエピソードを紹介するとよいのだろうかといったことを検討することや、法人内での研修の席で行う発表のために保育所内での話し合いの時間をもつことや、園外に出向いての研修の参加には困難が伴う可能性も示唆される。

2. 保育所の特徴（保育所ごとの比較によって示される、所属する職員に共通する特徴）

各保育所で多く挙げられていたテーマのうち、「CLの進め方」は10保育所で、「エピソード記録の取り方」は8保育所で、「保育の質向上」は7保育所で、「職員間の対話」は6保育所で上位3つのテーマに入っていた。

カンファレンスの実施に伴い、カンファレンスの進め方についての記述が出るのは自然なことであろう。また、カンファレンスの進め方について言及されていた保育所においては、保育の質向上やエピソード記録の取り方なども上位3つに含まれていた。全ての保育所において、その記述内容から、対話の機会をもつことやカンファレンスの実施について、なかなか時間がとれない、勤務形態などにより同じ場に全員が集まることが難しいといった記述から、参加者を確保することが難しい状況が窺える。そのような現場の状況がある中で、カンファレンスの進め方についての記述がなかった保育所については、様々な背景が考えられるものの、たわいもない話から始める、機会が持てない、会話をするメンバーが固定するといった記述から、職員の多忙や人間関係により、対話をする機会が持ちにくい状況が関係していることが推測される。

エピソード記録の取り方をテーマとした記述が多かった保育所では、「乳児職員」についての言及がある。乳児クラスでは発達的に見て、また乳児とのかかわりの特徴からそうした記録を取りにくい状況になるため、課題であると感じている可能性があるだろう。乳児クラスで記録を撮る方法で残すとしたら、保育者が撮ることは難しいため、フリーの保育士が撮影を行うなどの工夫が求められるのではないだろうか。

また、一件ではあるが、「意見を飲み込む」ことについての記述もあり、「雰囲気作り」といった記述もあることから、今回の研修のように対話を行う研修の場合、保育所内で対話をする雰囲気を作ることから時間をかけて始まる可能性も示唆される。

カンファレンスの実施に伴い、保育所内の共通理解を形成すること、意欲を高めていくことや参加者が活発に意見を出していくこと、参加して発言しやすくなるようなファシリテーションなどは重要なことである。原（2014）⁹⁾は、保育カンファレンスに参加し保育者同士のコミュニケーションをとっていったことが、保育者の専門的成長に対して重要な役割を果たし、特に1. 困っていることを話せることと 2. 他の保育者の質問から新たな視点を得ることの2点が重要なポイントであるとしている。困っていることを話せたり、他の保育者から新たな視点を得られたりするには、多忙な中であっても職員同士のコミュニケーションを取りやすいこと、職員同士がそ

れぞれの意見を大切にしながら保育に向けた共通理解を形成するような対話が大切である。職員研修を行うにあたり、多忙中にあっても、研修の場が有意義なものと感じられるような園内の雰囲気形成や、研修の場において参加者一人ひとりが意見を述べやすい充実した研修にするためにも、対話を通した研修をおこなうことは有意義であろう。

本研究では、保育者がファシリテーターになって行われた継続的なカンファレンスにおいて記載されたワークシートから、「自ら（の園）の課題と思われること」についての記述を分析し、テーマ・構成概念を探索的に分析した。その結果、研修の回を重ねるにつれて、テーマ・構成概念が研修の内容を反映していたこと、また、保育所ごとの特徴をみても、研修の内容を反映した内容になっていった保育所がある一方で、時間のなさ等、対話をするのが難しい状況が表されていた。

註

- 1) 今村光章・浅野教史・高橋 聡（2013）「記述的エピソード方を用いた園内研修会のシステム構築を目指して ― 保育援助技術の向上のために ―」『岐阜大学教育学部 教師教育研究』9, 83-93.
- 2) 奥山順子・佐藤敬子（2006）「保育の質的向上を目指す保育実践研究の方向 ― 保育者によるエピソード記録を中心とした園内研修の試み ―」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』28, 133-143.
- 3) 平野仁美・鈴木裕子（2007）「保育の場における保育者の育ちあい ― 遊び場面検討からの保育者の気づきと子どもの遊びを見る目の育ち ―」『名古屋柳城短期大学研究紀要』29, 221-237.
- 4) 平野仁美・小島千恵子・鈴木裕子（2008）「保育の場における保育者の育ちあいⅡ ― 遊び場面の実践記録検討を中心とした学び ―」『名古屋柳城短期大学研究紀要』30, 125-138.
- 5) 名須川知子・藤井恵美子・池田佐代子・法田喜代子・合田恒雄（2003）「保育者の資質向上に関する研究（Ⅱ）：ビデオ研修からの学び」『日本保育学会大会発表論文集』56, 714-715.
- 6) 利根川智子・和田明人・音山若穂・上村裕樹（2014）「継続的カンファレンスで対話を重ねることによる保育者の意識の変化」『会津大学短期大学部研究紀要』71, 33-59.
- 7) 大谷 尚（2007）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 ― 着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き ―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54, 27-44.
- 8) 大谷 尚（2011）「SCA: Steps for Coding and Theorization ― 明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 ―」『感性工学』10(3), 155-160.
- 9) 原 孝成（2014）「インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす効果」『鎌倉女子大学紀要』21, 43-54.

謝 辞

この研究をおこなうにあたり、ご協力くださいました法人の皆様には厚くお礼申し上げます。